

⑤ 大学におけるリズム系ダンス指導の実践と課題

横浜国立大学 高橋和子

1. はじめに

教員養成大学におけるダンスの授業について、中学校のダンス必修化以後では、特に、文部科学省学習指導要領・学習指導要領解説保健体育編（2008年度、2017年度）で提示された内容を指導する必要があると考えている。特に、リズム系ダンスの指導については、振り付け（振り写し）ダンスが主な内容になっているという全国調査（文科委託26）の結果を受け、振り写しでない指導方法と、それに対応する教材の工夫が必要になる。文部科学省から出された資料や筆者が関わった書籍やDVD映像にも、典型教材が紹介されている（下記参照）。

1) 文部科学省発刊

『新学習指導要領に基づく中学校保健体育科における「ダンス」リーフレット』2011

『学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引き』2013

2) ユニバース制作・（社）日本女子体育連盟資料提供

『新ダンス授業講座 ダンス授業実践資料集』2009

3) （公社）日本女子体育連盟発刊

『女子体育』ハンドブック特集号 2011～2017

2. 授業実践

上記の典型教材を参考にしながら、研究代表者による50分間の単元「はじめの段階」における教材提供と、外部講師（EXILE TETSUYA）による20分間の指導を計画・実践した。なお、学生は初めて「リズム系ダンス」を受講する2年生である。実施日は2017年5月30日（火）13:00～14:30、快晴で暑い日であった。教材は下記のとおりである。

1) 身近なわらべ歌遊びから、いつの間にか「ロック」「ヒップホップ」のリズムで弾んで踊る

①「茶摘み」を歌いながら手遊びをする→リズムを強調して動く→メンバーを変えて踊る

②「アルプス一万尺」を歌いながら手遊びをする→膝を柔らかくバウンドしリズムを取る
→2人の距離や動きを大きくして動く→メンバーを変えて踊る

③「十五夜さんのもちつき」を歌いながら動く→ダウンのリズムを強調して動く

④「あんたがたどこさ」を歌いながら2人向かい合ってジャンプをする
→膝を柔らかくバウンドしてリズムを取る

→4人組になり、手の動きや隊形を工夫して、一曲踊り続ける。

それに「はじめ」と「おわり」のポーズをつけ、タイトルも付けられそうなら付けて踊る。

→リズミカルな曲を流し、他のチームの踊りを観て感想を言い合う。

⑤「はないちもんめ」を4～5人が横一列になって、もう一組と向かい合い、歌いながら前進
や後退を繰り返す。

→「ヒップホップ」のリズムやラップ調で乗り方を学ぶ。

→前進して止まった時にリーダーのポーズの真似をする。次に進む時はリーダーを交代。

→ダンスバトルをして楽しむ。

*なお、リズムに乗って動けるようになった頃、適宜、リズムカルな曲をかけて踊る。

2) カウントで「振付ダンス」を踊らないリズム系ダンスの指導

外部講師である EXILE の TETSUYA 氏が、教員養成系大学生の実態を知りたいということで、研究代表者のリズム系ダンス指導の実際を見学に来られた。そこで、事前の打ち合わせにおいて、『文部科学省学習指導要領解説保健体育編（2008 年度）』を読んでくることと、20 分間という短い時間に、カウントで振り付けをしない条件でのモデル指導をお願いした。

「1) 身近なわらべ歌遊びから、いつの間にか「ロック」「ヒップホップ」のリズムで弾んで踊る」を見学・参加された TETSUYA 氏は、リズムダンスを初めて体験する学生達の「ノリ」の良さに驚いたようであった。グループで「はじめ」と「おわり」を付けて、一曲踊り続けてみる課題には、参加せずに見学されていた。自由な踊りを即座に踊ることは、あまり得意ではないようでもあった。

その後、TETSUYA 氏の指導が始まった。彼の指導は、研究代表者が依頼した条件をきちんと守り、カウントで縛らない、素晴らしい指導があつという間に展開し、20 分後には、一曲踊りきるまでになっていた。その流れは下記のようであった。

- ①歩く：前に、後ろに、いろいろな方向に「歩く」。音楽を変えながら、リズムの特徴を捉えるように促しながら、自身も動いて、学生の動きをサポートするように言葉かけをしていた。学生の様子を見ながら曲を選び、音が変わればリズムが変わることを強調して指導していた。
- ②2 人向かい合って、今まで動いたモティーフをつなぎ合わせるように構成して動いた。
- ③縦一列になり、チューチュートレインの練習をした。
- ④「はじめ」と「おわり」を付けて、これまで動いたモティーフをつなぎ合わせ構成して動いた。

学生は EXILE の TETSUYA 氏が外部講師であることに、興奮し、非常に協力的に熱心に受講してした。このような動機づけにより、授業は通常に増して生き生きとノリがよく、集中して授業に参加している様子であった。また、彼の指導も、リズム系ダンスの本質を明確に捉えて、動きの選択も誰でもができる「歩く」という動きからの導入であり、音楽の選択も多岐にわたっていた。そのこともあり、学生たちは、自然に、アップテンポの曲であろうが少しスローな曲だろうが、音楽に乗って踊ることができるようになっていった。最後には、汗びっしょりになりながらも、満足の笑みと歓声が起こった。

3. 外部講師の指導に対する課題

有名人であるだけで、学生にとっては授業参加への動機づけが高い。しかし、外部指導者に授業を任せるときには、「何を」「どのように」指導してほしいかの打ち合わせを明確にする必要がある。そうでなければ、「すべてお任せ」になってしまい、本来の授業目標や指導方法が達成できなくなってしまう。TETSUYA 氏が行った振り付けダンスでないやり方や、仲間と相談して動きの構成や「はじめ」と「おわり」のポーズを考えたりすることは、「主体的」「協働的」「創造的」な教育の可能性を育むことにつながる。

本委託事業の実態調査においても、外部講師による指導は、全国の中学校現場では少ない現状である。しかし、研究代表者のこれまでの聞き取りからは、生徒が乗りやすいリズム系ダンス指導を外部講師に依頼している実践もあり、そこでは、授業者と外部指導者の密な打ち合わせと連携が必須であることが、授業を成功させる鍵であることが分かっている。まして、新学習指導要領で提示された「主体的対話的で深い学び」を実現されるには、中学校現場と外部指導者をつなぐコーディナータの役割を誰がどのように担うかが、とても重要になる。それがしっかりとしていないならば、授業は成功しないと考えられる。